

「当院が行う育児支援活動の評価」

医療法人社団会政彬会 野田医院

○田鍋いずみ、神宮司文子、原田あき、川越裕子

【抄録】

当院では多岐に渡る育児支援活動を行っている。これらの活動を始めてから15年になり、今後のあり方を検討することにした。

【目的】 育児支援活動の評価を明らかにする。

【調査方法】

調査期間： 2010年12月から2011年1月

調査方法： 参加者に調査の趣旨を説明し、同意を得られた66人に質問紙を配布し100%回収した。

【考察】 プログラムの回数、開催期間、内容を検討するための情報が得られた。

育児・心理的支援状況からは、自分の体調：「疲れやすい」「いらいらする」などの不定愁訴や「おなかのたるみ」「痩せない」などの記載があり、これらは、ピクスやヨガで直接改善できるとも考えられる。また赤ちゃんやおっぱい・授乳のこと、家事のことなどについては、これらの機会を相談の機会としてとらえ、相談機能を高めることができると考える。

育児ストレス状況では、PSIを使用しリスク状況を捉える問診表として使用できる可能性がある。また、子どもの心理や接し方などストレスが高かったことについて講演会を開催するのも一法である。

《今後の課題》

- 相談機能を高める
 - 1) 困っていることなどを加えPSIを問診票として、個人的にストレスの高い人を見出し、相談のきっかけを見つける。場合によっては地域に繋げる。
 - 2) 母親同士の交流機会を作り、経験や思いを表出する場を提供する。
 - 3) スタッフも継続的に関わり、相談できる雰囲気を作る。
- 子どもの心理や接し方などについて講演会を開催する。
- システムの改善をする。
 - 1) HP、メールでの教室の配信をする。
 - 2) 開催場所・回数の検討を行う。
 - 3) 託児の充実をはかる。